●中部

伊藤 美由紀

2024年２月に30年間継続した名古屋市の三井住友海上しらかわホールが閉館した。今まで名古屋の主要なオーケストラであるセントラル愛知，中部フィル，愛知室内オーケストラの定期公演の多くをこのホールで開催していた。名古屋市内でオーケストラの開催可能なサイズのホールが限定されており，今シーズンからは名古屋フィルの定期のみならず他の３団体も愛知県芸術劇場コンサートホールに集中する結果となった。そのため，愛知の主要オーケストラの定期の殆どを同じホールで聴くこととなり，各団体の演奏が比較しやすく，各団体のカラー，コンセプトを今まで以上に強く表示するようになってきているように感じた。同時に演奏の質，内容共に充実した公演が増えてきている。しかしながら，しらかわホールの２倍以上の客席数となるために集客も課題となっている。市外のホールでの開催も増えているものの，名古屋市内から行くのに不便さを感じてしまうという難点もある。

名古屋国際音楽祭では，昨年に続き名古屋フィルと音楽監督の川瀬賢太郎を迎えオープニング・ガラ・コンサートが４月にスタート。７月までの全６公演では，若手ソリストとして上野通明，小林愛実，藤田真央，亀井聖矢，佐藤晴真を迎え協奏曲を含んだプログラムを中心に取り上げる。愛知県出身の亀井，佐藤も含まれており，国際的に活躍する愛知県出身の若手奏者の地元オーケストラとの共演が年々増えており，地元での人気も高まりつつある。

今年度の名古屋市民芸術祭の音楽部門の参加団体には，金原聡子（ソプラノ），OpeRaku（オペラク），小林辰哉（和太鼓），鬼頭久美子（ピアノ），名古屋ビクトリア合唱団，マリンバアンサンブルmoko，Musicasa Tsuchikane（アンサンブル），秀平雄二（ピアノ），稲葉地オペラ振興会の名古屋市内で活躍する９団体／個人が選ばれ10-11月に開催された。

愛知県芸術劇場自主事業では，毎年力を入れているオルガンイベントとして，オルガニスト養成事業，大木麻理による名曲によるオルガン・アワーを含んだ６イベント。フランス人オルガニストのフランソワ・エスピナスによるコンサートでは，オルガンの古典作品のみならずメシアン／前奏曲，V.オーベルタン／ソナタ第６番など現代作品も含まれた興味深い公演となった。現代音楽公演としては２公演。「加藤訓子プロデュース　STEVE REICH PROJECT」では，加藤訓子のソロと若手打楽器奏者との共演による熱気のあるライヒ作品の好演となった。特に12名による約１時間の《ドラミング》の演奏は圧巻であった。ニンフェアール第20回公演「自然をめぐる対話」は，ドイツから迎えたアンサンブル・ホリゾンテと澤田幸江（ヴァイオリン）による伊藤美由紀，今井智景による新作初演を含んだ結成20周年公演となった。

名古屋フィル定期の「継承」シリーズ／「水の継承，鳥の継承」（１月）では，坂田直樹／水の鏡の委嘱初演を含んだ杉山洋一・指揮デビュー公演となった。川瀬賢太郎（音楽監督）による「日本の地方文化の継承」（２月）は，邦人作曲家６名の作品に焦点を当てた今までにない珍しいプログラム。シーズン最後は，松井慶太（指揮）による古典派の継承をテーマに藤倉大／ヴィオラ協奏曲『ウェイファインダー』の初演を含んだ公演。４月からの新シリーズ「喜怒哀楽」は，スメタナ生誕200年記念公演として，小林研一郎（指揮）によるスメタナ／連作交響詩『わが祖国』で始まる。アンガス・ウェブスター（指揮）による「仲間を失う哀しみ」（５月）は，小川響子のコンサートマスター就任公演となった。川瀬賢太郎による「さよならの哀しみ」（６月）は，珍しいツィンバロンを使用したコダーイ／組曲『ハーリ・ヤーノシュ』を含む。「ある女性の怒りと哀しみ」（７月）は，ダミアン・イオリオ（指揮）の得意とするオール･ロシアプログラム。小泉和裕（名誉音楽監督）による「喜んで生きよ」（９月），チェロに佐藤晴真を迎えたグルダ／チェロ協奏曲を含む川瀬賢太郎による「運命に怒る」（10月），委嘱新作による坂田直樹／彩られた影を含んだ下野竜也（指揮）による「喜怒哀楽を超えて」（11月），ヴァイオリンにコンサートマスターの森岡聡を迎えたシューマン／ヴァイオリン協奏曲を含むアントニ・ヴィット（指揮）による「愛の喜びと哀しみ」（12月）で毎回，興味深いテーマで観客を魅了した。市民会館名曲シリーズは,「和欧混交」をテーマに日本の作曲家の作品を１曲含んだ公演で，尾高尚忠，望月京，細川俊夫らの作品を含む。そのほか，小出稚子（名フィル コンポーザー・イン・レジデンス／しゃちほこゴールデンマーチの委嘱初演を含んだ「子ども名曲コンサート」（９月）など子供向けの特別公演も多数開催された。

セントラル愛知定期の新シーズンのテーマは,「新しい景色，新しい音世界」。ピアノに務川慧悟を迎えベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲（ピアノ編曲版）を含んだ角田鋼亮音楽監督就任記念は,「新しい音色」（４月）に焦点を当てたプログラム。大友直人（指揮）による「フィンランドの景色」（５月），レオシュ・スワロフスキー（名誉音楽監督）による「チェコの香り」（７月），上野通明をチェロに迎えてウィリアム・ウォルトン／チェロ協奏曲，アーサー・ブリス／色彩交響曲などあまり演奏会で取り上げられない作品を含んだ角田による「イギリスの色彩」（９月),「夢～愛・童心・幸福～」（11月）は，名古屋少年少女合唱団と共にチャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」を含む。

中部フィル定期の昨シーズンから継続する北欧シリーズは，秋山和慶（芸術監督）により完結された。Vol.４（６月）は，石井楓子（ピアノ）を迎えてグリーグ／ピアノ協奏曲，シベリウス／交響曲第４番を含む。Vol.５（９月）は，オール・シベリウス・プログラム。クラリネットにコハーンを迎え技巧的で難曲でもあるニールセン／クラリネット協奏曲を含み，Vol.６（11月）は，シベリウス・チクルスの集大成としてスケールの大きな充実した音色によりシベリウス／交響曲第２番でシリーズを締めくくる。

今シーズンの愛知室内オーケストラ定期は，昨年までのA定期，B定期という区分けではなく愛知県芸術劇場で７公演，東海市芸術劇場で３公演開催。山下一史（音楽監督）による５公演は，小山実稚恵，清水和音を迎えたピアノ協奏曲を含んだ４月の２公演，権代敦彦（コンポーザー・イン・レジデンス）のチェンバロとオーケストラのための委嘱作品初演，マリンバの安江佐和子を迎えてハチャトゥリアン／ヴァイオリン協奏曲（マリンバ版）を含んだ８月公演，森谷真里（ソプラノ）シリーズvol.１（９月)。そして３回目となるオーケストラ・プロジェクトとのコラボ公演（10月）は，メンバーの３名の作曲家：ロクリアン正岡，土屋雄，水野みか子の個性的な新作を初演。

その他，県内作曲家主催による公演では，音楽クラコ座vol.12「対位法は変容する」（1/8），８月から10月にかけて電子音響に焦点を当てた公演，レクチャー，インスタレーションなどの７イベントを含んだ「ミッドジャパン音の芸術祭2024」が開催された。

伊藤美由紀（いとう・みゆき）

コロンビア大学（ニューヨーク）で作曲をトリスタン・ミュライユに師事，博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAMにて研鑽を積む。ニンフェアールの代表として自主企画公演を定期的に展開し，第14回佐治敬三賞，名古屋市民芸術祭特別賞「クリエイティブ企画賞」を受賞。国内外で作品の発表を続け，千葉商科大学などで後進の指導にあたっている。http://www.miyuki-ito.com/Miyuki_Ito/Home.html。